

木造日蓮上人立像



〔指定年月日〕平成一六年三月二四日
〔種別〕有形文化財（彫刻）
〔名称〕木造日蓮上人立像
〔点数〕一軀
〔所有者等〕慈宏寺
〔所在地等〕宮前三十一―三

木造日蓮上人立像

慈宏寺の本尊で「荒布の祖師」として親しまれている本像は、像高六二cm、肩巾一五cmの寄木造りの像で、玉眼を嵌入している。

像容は右手で杖をつき、左手を胸前に曲げ、数珠を持ち直立した日蓮上人の像で、木造の着衣姿を彫出し、彩色がほどこされている。本像は両足を少し広げ、顔を心持ち下にむけて立つ。眼もとはやさしく、鼻筋がとおり、閉じた口元の間に朱が少し残る。頬や顎のあたりに張りがあり、耳朶の大きな耳の形が美しい。穏やかで力強い面貌の表現には池上本門寺祖師堂の日蓮上人像と共通したところがあり、宗祖にふさわしい高邁な精神をそなえた上人の人間像を見事に表出している。

本像において特に注目すべきは身にまとう袈裟の表現で、金泥・緑青・朱など極彩色で唐草文や花文をあしらひ、しかも華美に流れず、むしろ上人像の莊嚴を一層たかめる効果をもたらしている。日蓮の木像は池上本門寺祖師堂の像をはじめとして、後世つくられたものは坐像が多いが、本像はそうした伝統的な形式を破り、立像としての効果を生かし、気品にあふれた生彩に富む像で、肖像彫刻としても秀逸である。

本像は、彫刻・彩色ともに洗練された感覚をそなえた腕のある専門の仏師の作と推測される。制作年代については、本寺開創の一七世紀後半とするのが妥当と思われる。

なお「荒布の祖師」のいわれは、弘長元年（一二六一）上人が「立正安国論」を出して幕府の忌諱に触れ伊豆に流刑されるとき、随行を許されなかった弟子の日朗が荒布の巻きついた流木に師を偲んで彫ったという伝えによる。

本像は、日蓮上人木像として貴重な文化財であるばかりでなく、彫刻・彩色の上から見ても美術史上、肖像彫刻として優秀な作であり、慈宏寺の歴史を知る上でも高い価値を有する作品である。

【文化財所在地】

